

# YOTSUBAの風



伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校 学校通信 第20号 令和5年3月6日発行

## 令和4年度第9回卒業証書授与式

3月1日（水）令和4年度第9回卒業証書授与式が行われ、9期生119名が卒業しました。

当日は、卒業生の前途を祝うかのように、春の到来を感じさせる穏やかな陽気であり、新型コロナウイルス感染症拡大防止策を講じながら、厳粛に挙行されました。マスクについては、各自の判断で着用できる状況ではありましたが、参加生徒、教職員、来賓については原則、マスクを着用せずに行われました。

在校生、教職員は、卒業した9期生のこれからの人生が豊かであることを祈念し、そして、四ツ葉学園をさらに発展させていくことの使命を感じられた1日となりました。



### <答辞>

激しく吹きしきる赤城おろしに耐える桜の花も、春を迎える準備に勤しむ季節となりました。本日は、私たち卒業生のために、このような心温まる卒業式を挙行していただきありがとうございます。ご多用の中、ご臨席賜ったご来賓の皆様、校長先生をはじめとする諸先生方、並びに関係者各位の皆様には、卒業生一同心より感謝申し上げます。先ほど校長先生から卒業証書を受け取り、この四ツ葉学園からの旅立ちを実感し、身の引き締まる思いです。

2017年4月10日。私たちは、この場所で入学式に出席しました。隣を見れば、知らない顔ばかりでした。6年間という長い、四ツ葉学園での生活への期待に胸を躍らせ、一抹の不安を抱きながらも「四ツ葉生」として、決意を新たにしました。あのときに着用した、おろしたての少し大きめの制服に、小さな綻びが幾つもあるのを発見すると、四ツ葉学園で過ごしてきた年月の長さを改めて感じさせられます。

6年間を振り返ってみると、多くの記憶が、9期生の仲間たちと共に積み上げてきたものであることに気づかされます。雨の中を着慣れない合羽を着て必死で自転車を漕いだ四ツ葉学園での最初の授業日から、雪が降り積もった最後の授業日まで、隣を見ればいつも仲間がいました。入学後間もなく行われた宿泊オリエンテーション、仲間とともに創り上げた第2回槻ノ輪祭、心を燃やした合唱コンクール、体育祭。これらを通して、私たちの心の距離は、確実に縮まっていきました。

後期課程3年間、私たちは、人と接する機会が制限される状況の中、できることを模索し、力強く、日々を歩んできました。なんとか開催にこぎつけ、再び創り上げた第3回槻ノ輪祭。寒色で染められていた学校が、119通りの色で、彩られました。今年度も、仲間と手を繋ぎ、心を重ねながら、各々の進路実現に向かって邁進してきました。これからもずっと、仲間とともに描いてきた6年間の軌跡は、色褪せること無く輝き続けていくでしょう。そして、この軌跡は私たちの力だけでは到底描けたものではありません。先生方、在校生、そして、両親、家族。私たちは皆さんに、随分と、随分と、支えられてきました。

先生方。離退職された方々を含め、数えきれないほどのご支援ご鞭撻をいただきました。好奇心をくすぐる授業や部活動をはじめ、進路などの相談にも時間を惜しまずに親身に乘っていただき、時に優しく厳しく私たちを導いてくださいました。そして、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、新しい生活様式が求められるようになった中でも、私たちの安全な学校生活のために尽力していただき、実現可能な行事の形を、粘り強く模索してくださいました。ついに、私たちは先生方のもとから巣立ちます。四ツ葉学園で学んだことを糧に夢を実現し、10年後、20年後、私達の活躍を、胸を張って報告できるように、これからも精進いたします。



在校生の皆さん。部活動や委員会で生き生きと活動する皆さんの姿は、後輩だけれども、頼もしく感じられました。好奇心旺盛で何でも質問し、みるみる成長していく皆さんは、誰にでも誇れるような存在でした。後輩を持つことで「先輩」としての責任感や、指導力、伝達力が自然と養われてきました。皆さんの力で、四ツ葉学園の年輪を、絶やすことなく、さらに刻み続けてください。同じ空の下で、全力で応援しています。両親、家族の皆さん。今見ている私達の背中、入学式で見たそのときの背中よりも、勇ましく、頼もしくなっているのでしょうか。私たちは、6年間で成長した背中を見せることが出来ているのでしょうか。もし出来ているのだとし



たら、それは皆さんのおかげです。毎日朝早く起きてお弁当を作り、汚れたYシャツやユニフォームを洗濯し、学校や塾の送り迎えをし、私達の意志決定を尊重してくれた、お母さんやお父さん、家族の皆さんのおかげです。素直になれず、時には反抗的になってしまい、悩ませてしまうこともあったと思います。でも、どんな時でも応援し、陰で支え続けてくれた皆さんがいなければ、今の私達はありません。次は、私達が恩返しするときです。今まで、本当にありがとうございます。そして、これからも宜しくお願いします。新天地にはばたき、夢に向かって前進する姿を見ていてください。

今、日本は、少子高齢化や自然災害、感染症の流行など、かつてないほどの危機に直面し、様々な問題が連鎖的に発生しています。私達は、このような状況で新たな世界に対峙し、挑戦し続けなければいけません。しかし、否応なく苦境が襲ってきたとしても、その運命に耐えること。自らが培った経験や見識、能力を他者へ還元すること。そして自身の生を全うすること。これらを忘れてはいけません。

卒業は、始まりでも、終わりでもなく、人生という長い道のりの通過点に過ぎません。後ろを振り返ると、数え切れないほどの足跡が、風化することなく残存していて、前方を望むと、果てしない道が、遠く、遠く、続いています。私達119名は誓います。それぞれの道を、途中で退くこと無く、最後まで歩きつづけることを。この四ツ葉学園で得た多くの出会い、学び、経験を糧とし、強く、強く、生を全うすることを。

結びに、ご臨席賜りました皆様に改めて格別の謝意を表し、伊勢崎市立四ツ葉学園中等教育学校の輝かしい発展を祈念して、答辞と致します。

卒業生代表 大塚 大智

#### <送辞>

冬の厳しい寒さも和らぎ、柔らかな日差しに春の訪れが感じられる今日の佳き日、卒業を迎える6年生の皆様、ご卒業おめでとうございます。会場に一堂に会することは叶いませんでしたが、在校生を代表し、心よりお祝い申し上げます。

今、先輩方は四ツ葉生として過ごしてきた日々を、どのように振り返っていらっしゃるでしょうか。数え切れないほどの思い出が頭の中を駆け巡っているのではないのでしょうか。私たちにとって先輩方は常に憧れであり、目標でもありました。私は5年前、入学したばかりで緊張していた時、通学途中のバスの中で先輩が緊張をほぐすかのように優しく話しかけてくださったことを今でも思い出します。こうした先輩にいつかなれるだろうかと思ったものです。部活動では、先輩方はいつもそばで私たちを導いてくださいました。1つの目標に向かって日々努力する大切さを時には優しく、時には厳しく、教えてくださいました。共に喜び、共に涙したこともありました。また、学校行事でも、先輩方は私たちを鼓舞してくださいました。「槻ノ輪祭」での工夫を凝らしたクラス発表や心躍るステージ、体育祭での全力で競技に取り組む姿から、全校生徒が1つになってやり遂げる楽しさを教えていただきました。こうした私たちの記憶は確実に今、在校生が「良い先輩」となるための道標となっています。

現代は、これまでの常識が通用しないこと、想像もしない事態が次々と起こることを私たちに突きつけます。そのため、世の中の変化にいかに適応していくかではなく、変化をどう乗り越えるかが重要となっているように思います。コロナ禍により、先輩方には、想像していた学校生活とは異なった状況が次々と訪れたはずですが、それでも前向きに、逞しく前進する姿を先輩方は私たちに見せてくださいました。くじけたり、諦めたりするのではなく、挑戦し続ける強い心の大切さを教えてくださいました。

そんな先輩方が明日からはいらっしゃいません。空っぽになる教室を思うと、とても寂しく、10期生の私たちが先輩方の代わりとなって、後輩達の模範となれるのか、不安な思いが溢れてきます。しかし、先輩方が受け継ぎ、築いてこられた四ツ葉学園を私たちが立派に引き継ぐこと、そしてこの四ツ葉学園をより一層素晴らしい学校にするために努力することを誓いたいと思います。それが、四ツ葉学園を旅立つ先輩方への恩返しになると信じるからです。

最後になりましたが、卒業生の皆様のご活躍を心よりお祈り申し上げ、送辞といたします。

在校生代表 板井 汰月

